

## アメリカ史学会 第53回例会（修士論文報告会）報告

### 第1報告

報告者：今井海月（東京大・院）

タイトル：ハワイ音楽と先住民運動——系譜と空間の観点から

コメンテーター：飯島真里子（上智大）

### 第2報告

報告者：ディナ・ハッサン（東京大・院）

タイトル：「黄人の観た黒人の世界」——20世紀前半における日本人知識人のアメリカ黒人観

コメンテーター：荒木圭子（東海大）

### 第3報告

報告者：高橋茜（東京大・院）

タイトル：ニューディール期から第二次世界大戦期のアメリカ南西部における農場・食品加工業労働運動——マルチエスニック組合のメキシコ系労働者に着目して

コメンテーター：小田悠生（中央大）

### 第4報告

報告者：山崎香織（東京大・院）

タイトル：Rethinking “Human Rights Diplomacy”: U.S.-South Korea Relations under the Carter Administration（「人権外交」再考——カーター政権下の米韓関係）

コメンテーター：伊藤裕子（亜細亜大）

なお、報告者の所属はいずれも2022年2月時点でのものである。

日時：2022年4月23日（土）13:00-17:35

会場：オンライン開催(Zoom)

### 概要

第53回は例年通り、2021年度に提出された修士論文の報告会として実施され、参加者は約50名であった。

第1報告では、今井氏により、脱植民地主義の視点からハワイ音楽（メレ）の歴史を記述し、植民地化によるハワイ先住民社会（ラーフイ）の断絶という一般的な歴史観に挑戦する意欲的な試みの成果が紹介された。幼い頃からハワイ音楽に親しんできた今井氏は、論文中

でハワイ語表現を分析概念として多用したが、コメンテーターの飯島氏はそれを先住民社会との対話を示すものと肯定的に捉えた。また今井論文の強みとして、ハワイ王国から現在までを扱うという時間的な射程の長さが強調された。そのうえで、多民族社会であるハワイの実情を踏まえ、白人入植者とハワイ先住民、都市と農村といった二項対立的な枠組みを超える必要性が提起された。フロアからは、先住民文化を論じる上では不可欠といえる「神聖性」に関する質問があった。

ハッサン氏による第2報告は、1920年から45年までのアメリカ黒人と日本人知識人の知的交流について、特に後者の黒人観を中心に考察するものであった。日本側のアクターとしては、国粋主義者、共産主義者、日本政府が取り上げられており、ハッサン氏の修士論文は3者について一次史料を用いた丁寧な分析を加えたものであった。荒木氏のコメントは環太平洋の視点を取り入れることで、ブラック・インターナショナリズムの限界、帝国主義に寄り添う側面を描き出そうとするハッサン氏の研究の可能性を高く評価するものであった。その糸口としては、例えば日本側のアクターの相互関係をさらに考察するという提言がなされた。フロアからも史料に関するコメントがなされた。

高橋氏が行った第3報告は、アメリカ缶詰・農業・包装労働者連盟（UCAPAWA）をニューディール期におけるマルチエスニックな労働運動の事例として位置付けるものであった。高橋氏はUCAPAWAの刊行物を主な史料として用い、短命に終わったとはいえ人種やエスニシティ、性別、職能の壁を越え、多様な労働者を動員した組合の功績を積極的に評価した。小田氏のコメントは高橋氏の考察対象が論文のタイトル以上に広がっていることを踏まえ、UCAPAWAを切り口として、アメリカ史研究における「南西部」という地域的な枠組みやマルチエスニックという概念を問い直す可能性を示唆するものであった。さらにフロアから、UCAPAWAがアメリカ国籍や就労資格のない労働者をどのように扱っていたのかという質問があがった。

最後に行われた第4報告では、山崎氏がカーター政権期の米韓関係を事例に、「人権外交」の矛盾と限界を議論した。米国が軍事独裁政権下の韓国における反体制派への人権侵害を黙認した背景について、政府間関係にとどまらず、人権を推進した民間の国際的なネットワークにも目を向けた考察が提示された。伊藤氏は人権外交という難しいトピックに果敢に取り組んだ山崎氏の論証を評価し、その長期的な遺産や政策決定過程、史料についてコメントをおこなった。さらにフロアからは、福音派とカーターの人権外交の関係性、キッシンジャー外交とカーター政権の人権外交の断絶と連続性に関する質問が寄せられた。

2021年度に提出された修士論文はいずれもコロナ禍において、米国での史料調査やフィールドワークの機会が限られる中で執筆されたものである。どの報告に対しても、日本で手に入る資料、オンラインや個人的な伝手などで入手した史料を最大限活用し、工夫を重ねて完成された研究に対する賞賛の声が寄せられた。

文責 運営委員（大鳥）